

平成 27 年 10 月 30 日 (金)

人権学習講演会



10月30日(金)13時から、講師に西村忠彦氏をお招きし、「みんなひとりひとりおのがじし自分の物語を紡いで生きることができるようにと願って」と題し、人間として生きていくにあたって、足元に目を向けることこそ大事ではないか?そんな視点から広く人権問題について、80分間にわたり語っていただきました。講演の冒頭に、大町高校がこれまで山と自然とのかかわりを大切にしてきた学校、カール・ブッセの詩の“畏敬と親しみ”を紹介していただきました。紡ぐということは、材料の綿や繊維をより合わせてしっかりした糸を作ること。そしてその糸を縦糸と横糸にして、布が織られていく。自分の物語というのは嬉しいこと楽しいこと、そしてつらいこと、時には哀しいことを自分らしく受けとめて自分らしい自分ならではの糸で織りものを作っていくことの大切さを語っていただきました。西村忠彦氏は現在「サラバ原発・変えよう暮らしの会」発足人、「学都松本推進協議会」会長、「きけわだつみのこえ70年のつどい」代表などを務め、主に松本市における反核・平和を求める市民運動に関わっています。



大町高等学校人権教育講演会

2015年10月30日

みんなひとりひとりおのがじし自分の物語を紡いで生きることが
できるようにと願って

西村 忠彦

はじめに—私の大町高校へのイメージ

山のふところに抱かれた山と自然とのかかわりを大切にしてきた学校、
カール・ブッセの詩 Home on the range. 畏敬と親しみ
私の願い

人は誰でもひとりひとりのおのがじし自分の物語を紡いで生きてほしい。
国が社会がそのひとつひとつの物語を大切にする在り方であってほしい。
その原点はふるさと。人は誰もふるさとを持つ。ふるさと、そこから人は憧れ
を抱き夢を求め心をかき立てられて、求めゆき、志を果たして、はたまた戻
さしぐみ帰りに行くところ。そのふるさとが物語が大事にされる国であってほ
しい。それが人権を大事にするということでありましょう。

—自己紹介

にしむらただひこ 1930年生まれ。(85歳)60歳まで高校教師 教科は英語
学校長も務めた 14歳から山岳部生活、教師になってから山岳部顧問
今もスキーに親しむ、年に1回八方尾根に登りオリンピックコースを滑り降り
るのを楽しみにしている。

現在、戦争をさせない1000人委員会呼びかけ人、きけわだつみのこえ70年
の会代表、サラバ原発・変えよう暮らしの会世話人
日本山岳会会員 松本深志高校山岳部 OB会顧問

—所信

人間の根源的な権利を奪う、奪おうとすることが公然と組織的に行われること
に断固異を唱えていきたい。その最たるものは戦争への指向であり、原子力発
電の問題である。そのことへの責任ある対応を求めていきたい。この世に命
ある限り、それが80余年生きてきたおれの責務と考えています。

人間の根源的な権利を奪う、奪おうとすることが公然と組織的に行われるのが戦争であり、